

継体天皇の地域文化的・歴史的価値と産業形成の起点に関する考察

A study of the origin of the industry formation about regional cultural and historical value of the Emperor Keitai

西崎雅仁* 坂田桂子**

Masahito Nishizaki, Keiko Sakata

Summary

The purpose of this paper is to discuss the industry value formation. It will make considerations about the historic achievement passed emperor went to each era in Fukui each region. The re-recognized as a historical legend of Emperor Keitai, consider a strategy that helps to regional activation and the formation of cultural and historical value of the Emperor Keitai and traditional industries in the current historical value.

キーワード：継体天皇，文化的・歴史的価値，産業価値形成

Keywords：Emperor Keitai, cultural and historical value, current historical value.

1. はじめに

継体天皇は、古墳時代に治水事業を奨励し、福井の伝統産業である越前漆器や越前和紙等の産業発展に多大な貢献を行い、産業の基礎を築いた人物である。県内各地には、継体天皇に関わる伝説や神社が数多く残され、最近でも、生誕 1500 年を記念して 1500 年誕生祭などの行事が大々的に行われた。最近ではその功績が再認識され、福井ブランドの象徴として、越前和紙や越前漆器などの産業の広告・宣伝に継体天皇の名前が活用されるなど、福井の顔として宣伝に使われるようになってきた。しかし、現状認識としては、文化的・歴史価値が高く活用価値の高い人物であるにもかかわらず、県外はもとより県内においても継体天皇についての歴史や偉業を学ぶ機会は少なく認知度も低いのが現状である。そのため、継体天皇の文化的・歴史価値を伝統産業や地域の活性化に有効活用できる可能性があると思われ、継体天皇の出生や治世を明らかにすることで、福井の伝統産業や産業の発展にどのような影響

を及ぼしてきた人物であるのかを再認識することでその価値の高さの根拠作りを行う。そのためには、継体天皇が福井各地域で時代ごとに行った業績について歴史的な考察を行い、継体天皇の伝説を史実として再認識をし、歴史的な価値を現在における伝統産業と継体天皇のネームバリューを視座に据えた文化的・歴史価値の形成や地域活性化に役に立てる方策やさらなる産業価値形成について考察するのが本稿の目的である。

2. 継体天皇に関する諸説

継体天皇は、第 26 代の天皇であり、福井県出身の唯一の天皇として知られている人物である。3 世紀半ばから 7 世紀末の古墳時代に活躍し、天皇としての在位期間は 507 年から 531 年である。“継体”という名は、平安時代以降の書物に書かれていた死後の名前である。生前の名前である諱は、『日本書紀』では“男大迹”，『古事記』では“袁本杼”，また『上宮記』では“乎富等”と記され、どれも“オホト”と読まれていた。

*大同大学 情報学部 総合情報学科 経営情報専攻

**福井県立大学 経済学部 経営学科

ゆかりの地である越前はかつて平原が広がり農耕や居住に適さない土地であった。男大迹王（オホト王）はこの地を治めると、まず足羽山に社殿を建て大宮地之霊（おおみやどころのみたま）を祀りこの地の守護神とした。これが現在の足羽神社である。オホト王は大規模な治水事業を行い、九頭竜川・足羽川・日野川の三大河川を造ることで湿原の干拓に成功した。このため越前平野は実り豊かな土地となり人々が定住できるようになった。続いて港を開き水運を発展させ稲作、養蚕、採石、製紙、製鉄などを奨励し、様々な産業を発達させる基礎を作ったと考えられる。

3. 継体天皇の出生

3.1 『日本書紀』・『古事記』の記述

継体天皇の出生に関する『日本書紀』と『古事記』の記述を比較してみると、系譜や出身地、年齢などに違いがある。

『日本書紀』の記述には、男大迹王（継体）は応神天皇（第15代天皇）の5世の孫である彦主人王（ひこうしおう）の子であり、母である振媛は、垂仁天皇（第11代天皇）の7世の孫であると書かれている。オホト王（継体）の父である彦主人王（ひこうしおう）は、近江高鳴郡三尾の別業において、三国の坂中井の振媛が非常に美人であることを聞き、よびよせて妃とし、オホト王が生まれたとある。しかし、オホト王がまだ幼いころに彦主人王は世を去り、母の振媛は、実家のある坂中井の高向に帰り、オホト王を育てた。たまたま武烈天皇が亡くなり、子がいないため継嗣が絶えようとしたとき、大伴金村が三国よりオホト王を迎えて、天皇となった。これらの記述より、継体天皇のおもな地盤は越前とみてよいことになる。

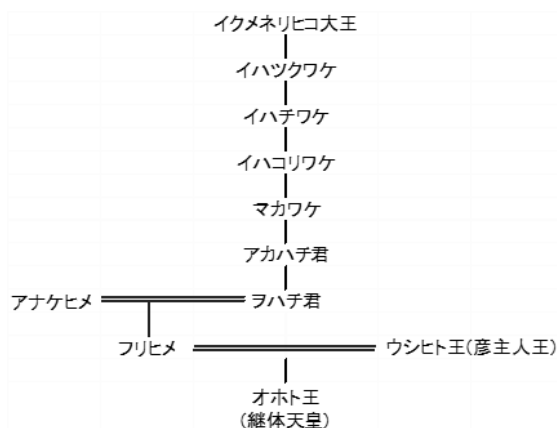
一方『古事記』の記述には、「武烈天皇（第25代天皇）が亡くなったとき、日嗣をうける皇子が絶えてしまっていた。そこで応神天皇の5世の孫である袁本杼命（おほとのみこと）を淡海（近江）の国から招き、手白髪命（たしらかのみこと）にめあわせ、天の下を授け奉った。袁本杼命は磐余玉穗宮（いわれたまほのみや）で天の下を治めた。」とある。子どものなかった武烈天皇が崩御し、王位を継ぐべき王（大王を父に持つ男王の意）がいなくなったことを受けて、応神天皇5世の孫である継体を近江から上京させ、仁賢天皇の皇女手白髪命と結婚させ、王位を授けたということである。短い文章ではあるが、継体が近江出身であること、前の王統の皇女手白髪命との結婚を、いわば条件として即位を認められた、入り婿的な王位継承であったことなどが読みとれる。

このふたつの記述を比較してみると、『古事記』では、オホト王は応神天皇の5世の孫と書かれているのに対し、『日本書紀』では、応神天皇の6世の孫となっている。またオホト王が淡海から招かれたとある『古事記』に対し、『日本書紀』ではオホトは三国より迎えられて天皇になったとあり、系譜や出身地に矛盾があることがわかる。また継体天皇の死と御陵について、『古事記』は次のように記している。「天皇は43歳で亡くなった。（丁未の年（西暦527年）、4月9日に崩御された。）」『古事記』は43歳で崩じたとしているが、『日本書紀』の82歳で崩じたという所伝の方が、より信憑性がある。そこで、継体天皇の出生を母系と父系の系譜から検証する。

3.2 母の系譜

図表1の系譜を見てみると、『上宮記』は継体天皇の母系をイクメネリヒコ大王からはじめている。このイクメネリヒコ大王は垂仁大王（第11代天皇）をさしていると考えられるが、これは信憑性が薄く、その次のイハツクワケこそが本当の始祖であると考えられている。イハツクワケとその子であるイハチワケは、能登から近江にかけて勢力を張った豪族である三尾氏の始祖と考えられている人物である。このことから、継体の母である振媛は、三尾氏の子孫であると考えられる。イハツクワケもしくはその子孫をまつる神社は、能登の羽咋神社より近江の高鳴郡の水尾神社まで北陸に広く分布し、特に越前に大湊神社（坂井市三国町）・坂井郡の高向神社（坂井市丸岡町）・足羽郡の分神社（福井市）の3社を数える。すなわち三尾氏は、能登より近江にかけて繁栄した豪族で、その分布の中心はむしろ越前にあったとも考えられる。

図表1 継体天皇の系譜（上宮記）

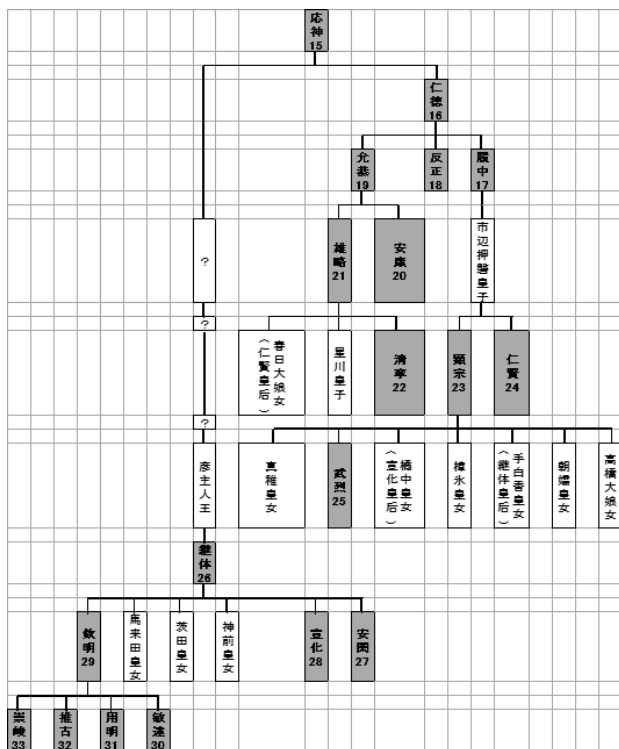


（出所） 隼田嘉彦・白崎昭一郎・松浦義則・木村亮『福井県の歴史』山川出版社、2006年

3.3 父の系譜

次に、継体天皇の出生を父系から見てみる。オホト王の父である彦主人王は、『日本書紀』の記述で「近江国の高嶋郡三尾の別業にいた」とかかれており、近江出身の人物と考えられてきた。しかし、“別業”とは別荘の意味であり、本拠地とは異なる。このことから、彦主人王の出身地が明らかになっていないことや、応神天皇から彦主人王にかけての系譜が明らかになっていない点から、継体天皇が本当に応神天皇の5世の孫であったのかという問題につながる。しかし、三尾の別業という表記や、継体天皇の後妃のうち2人が三尾氏出身であることから、継体天皇が三尾氏と強い関係を持っていることがうかがえる。この史実の曖昧性を埋めてくれるのが、『新日本紀』に引用される「上宮記一云」の所伝である。この中に、継体天皇の出自系譜や出生伝承が引用されている。これによると、応神一若野毛二侯王（わかぬけふたまたおう）一意富富等王（おほほどおう）一乎非王（おひおう）一彦主人王一継体天皇という系譜が書かれている。

図表2 継体天皇の系譜



(出所) 水谷千秋『継体天皇と朝鮮半島の謎』文春新書、2013年

母系と父系から継体天皇の出生を見たことで、継体天皇が三尾氏という強大な勢力を持った豪族と深く関わりがあることがわかった。この三尾とは、近江国高島郡三尾のこととされてきたが、3-2でも述べたように、最近では越前に三尾の国があったと考えられており、

三尾の国→三国となったとされている。振媛は三国の坂名井(高向)から迎えられたとされているが、この坂名井とは今の坂井郡丸岡町の高椋あたりの地域である。正倉院に現存する天平5年(722)の『山背国愛宕郡計帳』によると、“越前国坂井郡水尾郷”という表記があり、『延喜式』の北陸道にも“三尾”の駅名が存在している。これらのことから、当時三国湊をふくむ越前の北部一帯が三尾郷または水尾郷と呼ばれていた可能性が高い。そして、継体天皇が越の国から迎えられ即位した背景には、この越前北部を拠点にする三尾氏の一族の力が大きく関わっていたと考えられる。

4. 継体天皇の治世

継体天皇が越前で強大な力を持ち進出し、天皇として受け入れられていった背景には、農業の発展や鉄産地の開拓、他にも近江や尾張など近隣の国々との関係、外交などさまざまな要因が考えられる。福井の多くの産業は、そういった継体天皇の治世下において発祥したり、基礎を築いてきたと考えられる。そこで、継体天皇が越前で力を強めていき、天皇として受け入れられた要因を検証していく。

4-1. 越前における農業の発展

継体天皇がヤマト朝廷の大王に迎えられたことは、その実力が広く天下に認められていなければ可能でなかった。継体天皇進出の根幹の一つに、米を主体とした農業生産性の向上が考えられる。越前における継体天皇伝説は非常に多いが、その大部分は治水に結びついたものである。それは5世紀末ごろにおける九頭竜川水系における農業の発展を反映するものであった。灌漑技術の革新が進行すると、元来肥沃な越前平野の生産力は飛躍的に増大していったに違いない。図表3は、『弘仁式』(701~819年の国家法令の施行細則を編纂したもの)ならびに『延喜式』(905~927年の国家法令の施行細則を編纂したもの)の主税上に記されている公出挙(くすいこ)稲の数値である。出挙とは、播種期に種子を貸与し、収穫期に利子を付けて返済させる慣行のことである。農業生産の推進・奨励、すなわち勸農の一つとして位置づけられており、律令制においては、公的な公出挙と私的な私出挙(しすいこ)があった。これはもとより米の総収穫量自体を示すものではないが、まったく無関係とも考えられず、米の生産力を見る上で参考となる。『弘仁式』において越前(加賀を含む)の出挙稲数値は、陸奥・肥後・上野について全国第4位である。『延喜式』においては越前・加賀に分かれているが、もしこれを合算するならば全国第2

位となる。これらは平安時代の史料であるが、6世紀ごろとだいたい並行するものであると考えられる。陸奥・肥後などはおそらく律令制以後の発展が顕著であろうから、古墳時代後期ごろには越前の米生産力が全国1位であった可能性さえ否定できない。このことから、継体天皇が権勢を誇った時代、越前は農業が盛んで人口も多く、全国的に見ても豊かで発展した地域であったことがわかる。

図表3 『弘仁式』『延喜式』にみえる公出挙稲

『弘仁式』			『延喜式』		
	数値	割合		数値	割合
陸奥	1,285,200	22%	常陸	1,846,000	23%
肥後	1,230,000	21%	越前	1,714,000	22%
上野	1,140,000	20%	加賀		
越前	1,095,000	19%	陸奥	1,582,715	20%
播磨	1,000,000	17%	肥後	1,579,117	20%
			播磨	1,221,000	15%
合計	5,750,200		合計	7,942,832	

(注1)『弘仁式』主税上は断簡による前欠のため、畿内・東海道の諸国および近江国の数値は不明である。したがってそれら以外の確認できる国を多い順に列挙した。

(注2)『延喜式』の越前は1,028,000束、加賀は686,000束である。

(出所)『福井県史』通史編1 原始・古代 による

4.2 鉄の奨励

昭和52～54年に発掘調査が行われた天神山七号墳(福井市)において、鉄の刀剣が第1主体部から11本、第2主体部からも約40本発見されている。正確な数は明らかではないが、50本を下らない鉄の刀剣が副葬されていた。このように惜しみなく古墳に鉄製利器を納めるということは、おそらく相当豊富な鉄資源や刀鍛冶が存在したものとみななければならない。

越前における鉄生産遺跡としては、1970年代に発見された細呂木遺跡(金津町)がある。その年代については諸説があるが、1400年±210年以前と推測され、これは6世紀中ごろを中心として、5世紀中ごろも可能性としては含むことになる。この遺跡調査により、5世紀後半頃より製鉄が行われていたことが確認されている。そこには九頭竜川によって運ばれてきた土砂によって自然堤防(砂堆)が形成されるが、そのなかに黒い帯状の層が見え、そこから濃度の高い砂鉄が採集することができる。この川砂鉄を原料にして製鉄が行われていたとは推測できる。ここで生産された鉄は鍬や鋤(すき)に刃先として加工され、洪積層の堅い土壌の耕起に用いられ、灌漑水路を掘ったり、古墳を築造するのに有効に使用されていたと思われる。また、金津の名称が示すように、そこは鉄(金物)を積み出す河港(津)があったと考えられる。

日本では、鉄鉱石が採れる場所が限られており、鉄鉱石を使った製鉄を行っているのは古代の山陽側(とくに備前、備中、備後)と、琵琶湖周辺に限られていた。その他の地域では古代から製鉄には砂鉄が使われていた。これらの違いは製鉄技術が伝わったルートに違いがあると言われている。平安時代になると、製鉄の原料は砂鉄に移行していき、現代でも日本刀の原料は砂鉄というのが伝統技術になっている。

また山尾幸久立命館大学教授によると、継体天皇の名“オホト大王”のホド(ホト)は鍛冶に関係のある言葉で、鉄を熱するための炉のことである。このホドは現在火床の字で表記されている。このホドが継体天皇の出自に関係あるとなれば、継体天皇は越前帯の製鉄の指導者であったかもしれないと考えられている。継体天皇は鉄を奨励し、製鉄して農具を作り、開墾を進め、「越の大国・越前」を形成したとされている。

越前金津では、鉄の生産が5世紀中ごろから始まっていた。刀剣はもちろん、鎧・兜を製造していたことは、一族の古墳から出土する遺品を見ても明らかである。また農・工具を作り領民に配布していたとも考えられる。鉄の刃先を持った鍬や鋤は、当時開発されていた洪積地台地の堅い土壌の耕起に効果をあげ、灌漑工事は進み、稲の生産は倍加していった。また工具は、それまで堅穴居住であった生活様式が高床建物へ移行していく際にも大きく役立っていたと考えられる。

4.3 稲作と鉄で近隣の国と連合

近江や尾張では、隣の国である越前で米や鉄の生産が盛況しているのを見て、黙っていたわけではなかった。琵琶湖の東側には肥沃な湿地帯があり、西側には砂鉄が採れる川(鴨川)が流れている。また、尾張氏が進出していた伊吹山の東南には、鉄鉱石を出す金生山があり、越前の協力を希っていた。継体天皇は、近江や尾張からの要請に対して、鉄生産を専業とする三尾氏一族を割いて、高嶋や金生山に向かわせ、技術移転したと考えられる。尾張連草香から目子媛(めのこひめ)を元妃(はじめのみめ)として、また高嶋の三尾君堅城(かたひ)から倭媛を、息長真手王から麻績娘子(おくみのいらつめ)を迎えたのも、この頃と思われる。このような協力体制が固まると、越前と近江・尾張の首長連合はますます強大・堅固となり、継体天皇は琵琶湖以北の国をまとめる統率者に推挙されていた。近江の息長氏・坂田氏らは、天野川、愛知川、野洲川流域の土地にあって、越前の土木技術を使って、琵琶湖の水や河川の氾濫を制御した。またカヤ・スキが広がる湿原を肥沃な水田に開墾し、灌漑水路を設けて水を流す技術を取り入れた。あるいは、川砂鉄や

山砂鉄が採れるところでは、鉄窯を設けて鉄を生成するようになった。その中心的な役割を果たしたのが越前の継体天皇であったと考えられる。

図表 4 継体大王関係地図



(出所)和田萃『継体王朝の謎』河出書房新社、1995年

4.4 継体天皇の妃

前節では、継体天皇と近隣の国である尾張や近江との関係を述べたが、その関係の深さは、継体天皇の妃たちの出身地を見ることでも明らかである。そこで、継体天皇と妃たちの関係を検証していく。

継体天皇が成人してから、その行動範囲はこれまでの越前中心から琵琶湖周辺にまで広がり、金生山や高嶋周辺に移っていった。継体天皇は、越前から連れて来た三尾氏一族を使って鉄生産活動を立ち上げ、または野洲川や愛知川流域などの広い湿原を水田に変えていった。この間、継体天皇は、馬や船が集まる北河内の樟葉（くすなは）周辺、息長氏が領有する摂津三嶋にも逗留したと考えられるし、宇治川と巨椋池（おぐらいけ）流域に勢力を張っていた和珥臣（わにのおみ）へも訪れていたと考えられる。

継体天皇の妃たちについて、『日本書紀』は身分の順で9名と書かれている。

図表 5 継体天皇の妃たち

	名前	父	地域
1	皇后 手白香皇女	仁賢天皇	大和
2	元妃 日子媛	尾張連草香	尾張
3	妃 稚子媛	三尾角折君	越前・角折
4	妃 広媛	坂田大跨王	近江・坂田
5	妃 麻績娘子	息長真手王	近江・息長
6	妃 関媛	茨田連小望	河内・茨田
7	妃 倭媛	三尾君堅槓	近江・三尾
8	妃 萋媛	和珥臣河内女	大和・和邇
9	妃 広媛	根王女	不明

(出所)『日本書紀』による

このように見てみると、天皇家から手白香皇女、中央豪族から茨田連小望女関媛、和珥臣河内女萋媛が、地方豪族からは尾張連草香女日子媛、近江系の坂田大跨王女広媛、息長真手王女麻績娘子、根王女広媛、三尾君堅槓女倭媛が、越前系の三尾角折君妹稚子媛があげられ、近江系からの妃が多いことが目立っている。こうした姻戚関係は、継体天皇の活動版図をよく表しているとともに、オホト王が天皇となるための支持基盤となっていた。琵琶湖を中心に越前、美濃、尾張、そして山背・河内の地域を含み、琵琶湖を介して日本海、そして伊勢湾・東国と通じていたということが読みとれる。継体天皇は12歳で三尾角折君の妹である稚子媛を貰い受けたという民間伝承が越前にはある。継体天皇と安閑天皇・宣化天皇の年齢を見ると、継体天皇はその後16歳程で尾張家から日子媛を貰い受けたと考えられる。その後、継体天皇一族は越前を離れ、近江・北河内・山城・摂津周辺で活動していたと考えられる。

4.5 朝鮮との交流

越前は古くから敦賀と三国という良港をもっていた。敦賀には白城神社・信露貴彦（しらぎひこ）神社などがあり、蘇那曷叱知（そなかしち）、都怒我阿羅斯等（つぬがあらしと）などの来航者の名前も伝わっている。天神山七号古墳からは朝鮮半島南部製の金の耳飾りが出土し、また二本松山古墳（吉田郡永平寺町）からは、韓国・高霊の池山洞三十二号古墳出土の冠と非常に似かよった銀鍍金の冠を出土している。越前が朝鮮半島南部と深い交流のあったことは明白である。

任那というのは朝鮮半島南部の地域で、古代の日本はここに何らかの権益をもっていた。継体天皇治世6年に百済が使いをよこして任那のうち、上哆唎（おこし

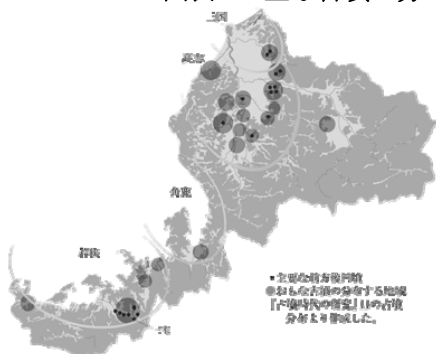
たり)・下哆唎(あろしたり)・娑陀(さだ)・牟婁(むろ)の4 県を分けてほしいと言ってきた。この要求を受けると、百済は更に己汶(こもん)・滯沙(たさ)の2 地の割譲も要求してきた。継体天皇の政権はこれを断ることができなかった。このとき百済に譲ったのは今の全羅南道のほぼ全域にわたる広い地域であり、日本の任那諸国への勢力は脆弱なものになった。

4.6 治世まとめ

継体天皇が即位した6 世紀前半といえば、日本の朝鮮統治が思わしくなくなる時期で、朝鮮からの鉄原料が入りにくくなったため、日本の鉄産地の開発が必要とされるにいたった。日本が朝鮮の統治に異常な執着をもったのも、新羅や任那の鉄資源を獲得するためであった。なぜなら鉄製武器の原料を確保しえたものが、日本全土を支配しうる有力な候補者になり得た。継体天皇は、全国でもいち早く鉄産地を開拓し、製鉄を奨励し農業に必要な工具のどの技術開発を進めていった。この時期の国産鉄の生産はめざましく発展し、従来の朝鮮鉄の依存から完全に脱却していたと見られている。

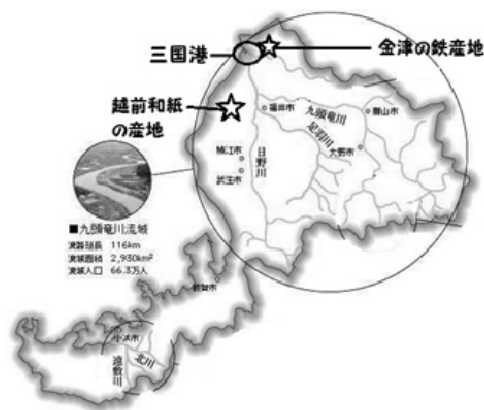
図表6・図表7からは、継体天皇が越前の北部一帯で勢力を保ち、三国港を中心に金津の外交や鉄産地の開拓を行っていたことがうかがえる。継体天皇は三尾氏という有力な豪族に支えられて農業の発展・鉄の採掘・朝鮮との交流などに貢献し、強大な力を持つようになった。さらに周辺の国々とも関係を強固にし、越前だけでなく近江・尾張にまで活動範囲を広げていったのではないかと考えられる。6 世紀以後、農業や手工業が発展して生産力があがり、民衆の生活も向上してくると、それを背景として群集墳が爆発的に増加してくる。なかでも足羽川の谷口に築かれた酒生(さかお)古墳群(福井市)は、北陸最大の規模をなしている。これらの考察から、当時の越前は、産業がさかんで人口も多く、はやくから文化も発達した地域であったことがわかる。こういった継体天皇の貢献が今の福井にのこる伝統産業や農業の発展の基礎をつくったと考えられる。

図表6 主な古墳の分布図



(出所) 図説『福井県史』による

図表7 越前の三大河川と越前和紙・鉄産地



5. 各市町村史から見る継体天皇の勢力範囲

5.1 福井市史の記述

福井県の各市町村史の継体天皇に関する記述をみることで、継体天皇の勢力がどの地域で有力だったのか図表8の地図で表した。また、その記述の内容から、福井県内の各市町村で継体天皇のどういった業績が伝えられているのかを記載する。図表8を見ると、継体天皇が勢力を誇っていた地域の中でも、特に治水や鉄産地の開拓などで産業が発達していたと考えられる福井市や坂井市など、古代の越前北部一帯の地域に継体天皇に関する記述が見られ、継体天皇の偉業が傳承され続けていることがわかる。

図表8 市町村史から見る継体天皇の勢力範囲



福井平野には九頭竜川、足羽川、日野川の3 大河川があるが、古代には、これらの河川が上流から運んだ土砂が海辺に砂洲状に高く積もった結果、長い堤防(砂堆)が形成され、その内側には広い湖・潟(ラグーン)

が出来上がっていた。継体天皇は、中国の長江中・下流域や江南地域から移住してきた渡来人を使って、越前瀉の水を海に落としたと伝えられている。

このように福井平野を貫流する九頭竜・足羽・日野の三大河川のいずれもの流域に、継体天皇の治水に関する伝承の存在が確認できる。この治水伝承は、継体天皇以前の事象が継体天皇に集約されたのか、継体天皇後の事象が継体天皇に付会されたのかは判断できないが、福井市において、農業の発展の背景には継体天皇が気付いた産業の基盤があるという意識が強く残っていることが確認できる。福井平野の遺跡は4世紀以降、平野部全般へ広がりを見せるようになり、灌漑施設を伴った遺構なども検出されている。

図表9 継体天皇の治水伝承

出所	伝承の内容
明治12年(1879)ころ 石川県編纂 『越前国神社明細帳』 足羽神社に伝わる	「オホトが越前に在住していたころ、国中に泥水が横溢(おういつ)していたので、人民が農耕できないのを憂い、足羽山に地をト(ぼく)して座摩五神を祀り、厚く神に誓って大いに土工を興し、日野・足羽・九頭竜の三大川を掘り、三国に水門を開いて氾濫を防止した。また、道路・溝渠(こうきょ)を通じて交通運漕の便を図り、田園を開いて人民を安堵させた」
『神社明細帳』 九頭竜川右岸の北横地(坂井郡丸岡町)の布久漏神社に伝わる	「オホトが越前の坂中井にいたころ、あたり一帯の泥沼地を憂っていたが、九頭竜川の水口を切り開いたところ、水が海に落ち耕地ができた。オホトの19番目の子である円媛(まどかひめ)が布久漏(ふくろ)郷に住み、現在の十郷用水の基礎を造った」
『神社明細帳』 九頭竜川左岸の鹿島神社(泉田町)に伝わる	「オホトの治水によってあたり一帯は農地となったが、まだあちこちに池や沼があった。池や沼には害を及ぼす亀が住んでいた。オホトはこれを憂いて、亀の駆除法を教えた。村人はこれを喜び、武甕槌(たけみかづち)を祀った」
『足羽郡誌後篇』 足羽川左岸の天王町に伝わる	「むかしこのあたり一帯は排水が悪く、一面が沼や沢であった。オホトの治水事業により沼沢が変じて田園となった。この恩に感謝するため、この地を天王(てんのう)と呼ぶことにした」
『神社明細帳』 日野川右岸の足羽神社(東下野町)に伝わる	「オホトが越前にいた時、坂井港へ水を通すために当地を訪れて調査を行った。その際安居山の麓の小高い所で休憩した」

(出所)福井市編『福井市史 通史編』三秀舎、平成9年3月31日

5.2 丸岡町史の記述

次に丸岡町史を検証してみると、丸岡町史には、振媛に関する記述が多く、県内出身の唯一の天皇を生んだ人物の出身地であることを主張して書かれていた。丸岡町は、振媛の出身地である越前高向(現在は高棕)がある地域である。

5世紀の初めころ、朝鮮から馬が入り、騎馬はもちろん物資の運送用にも使われていた。それだけでなく国内の米や塩の運送のためにも大いに活用されていた。また船も準構造船が運航することになり、一度に30～40人を運ぶことが出来るようになる。淀川や大和川、紀ノ川には河口に港ができて、そこで内航用の船に積み替えられるようになった。継体天皇は、これら馬や船を使って日本海沿岸の若狭や敦賀より琵琶湖を經由して木津川や淀川に到り、さらに大和の内部に物資を運ぶシステムを活用することで世の中の物流の仕組に変革をもたらし、より一層権力を集中させることに成功したと考えられる。継体天皇は琵琶湖を軸に、馬と船で流通を支配していたと考えられる。

古代、越前は「こしの口」とよばれ、北国の関門であった。近江路を経て畿内方面と往来があり、早くから発達した文化が伝わってきた。越前の北部を三国といい、その中に坂中井があり、現在の長畝(のうね)高棕から鳴鹿あたりを高棕郷といった。振媛の家はこの地方の豪族であった。

6. 継体天皇と渡来人

継体天皇の生まれ故郷である近江国高嶋郡の南市東遺跡・下五反田遺跡に、渡来人の生活の跡が見つかっている。これ以外にも、かつての三尾郷一帯には、渡来人の生活の跡がみられる集落の遺跡が多く残されている。これらの集落は、継体天皇の出生と深いかわりを持つ三尾氏一族の本拠地の一部であり、そのなかに継体天皇の父彦主人王の宮も含まれていたとみられる。そこには渡来人が住んでおり、在来の倭人たちとうまく住み分けをしながら生活を営んでいた。こうした、もともと国際的ともいえる環境の地で、継体天皇は生まれた。そのため幼少のころから、継体にとって渡来の文化は馴染み深いものであったと考えられる。鴨稻荷山古墳のある鴨川の近辺には、奈良時代・平安時代の木簡が多く発見された遺跡があり、鴨遺跡では「遠敷郡 遠敷郷 小丹里 秦人足嶋 庸米六斗」と書かれた木簡が見つかっている。「遠敷郡 遠敷郷 小丹里」とは、若狭国遠敷郡遠敷郷、現在の福井県小浜市のことである。高嶋から、のちに鯖街道と呼ばれる西北へ進む山道を行くと、現在の小浜市、若狭へ出る。

この木簡は、「秦人足嶋」という人物が貢物の米を、平城京に運ぶ際に高嶋を経由したとを示している。時代は後のものであるが、こうした史料を参照すると、高嶋在住の渡来人は、若狭から来た人々であったと考えられる。

6世紀の初め、朝鮮半島では北に高句麗が盤踞し、南には百済、新羅、この2国に囲まれて加羅や伽耶をめぐる情勢が緊迫化していた。高句麗は北朝の冊封を取り付け、南進を図っていた。百済は南朝と結び抵抗するが、高句麗の南下を抑えることが出来なかった。この結果、伽耶諸国の領域は脅かされ、この争いに当時台頭し始めた新羅が加わって、加羅・伽耶領域の争奪戦が始まっていた。伽耶には良質の鉄鉱山があり、そこでは鉄鐸を生産し、周辺諸国に出していた。その権限をめぐる朝鮮3国は一触即発の状況にあった。当時日本と朝鮮は国境が定められていたわけではなく、いわゆる一衣帯水の状況で、朝鮮半島から流民が大勢やって来たように、日本からも半島に大勢の日本人が米や木材、塩を持っていき、伽耶で生産される鉄と交換していた。この時代、日本には大陸からの文化が到来していた。『日本書紀』は、継体7年(513年)、百済が日本に五経博士段楊爾を送った事実を伝えており、538年には仏教が公伝した。渡来人は各地で職業集団として活躍し、水田開発・製鉄・紡績・造船・馬飼に関する技術や生産組織は部民制が施行される過程にあり、世の中は革命的に進展した。

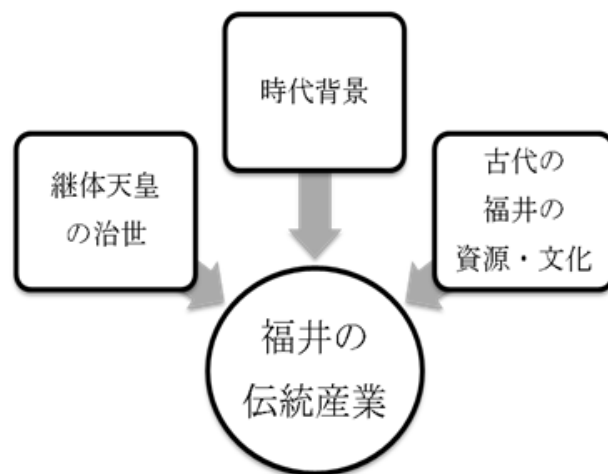
渡来人が越前に持ってきた文化としてさまざまなものがあるが、その1つに越前和紙がある。今立町は、日本和紙の地であり、ここから美濃、加賀をはじめ東北、四国、九州へと広がっていった。公伝によれば、610年(推古18年)高句麗僧によってヤマトの王権に伝えられたとされているが、実際にはこれ以前に越前には渡来民によって伝わっていた。天平3年(731)頃に越前で漉いた紙が、正倉院に現存している。以来、中世から近世にわたって優れた紙質で全国に知られ、政治的な文書に使われ、近世では紙幣などにも使われた。この紙漉きの技術も、古代の越前へ渡来民によってもたらされたものである。当時の社会状況から考えれば、新しい技術が入ってくる場合には、それらの技術を持った「人そのもの」が首長にひきいられて集団として渡ってくる。それは紙だけではなく、米づくりも、製鉄も、その他の新技術はすべてそうであった。紙漉きの技術も、そうした技術者の渡来をみて始めて実現した。越前和紙のおこりについては、朝鮮半島からの渡来集団によってもたらされ、さらに越前において改良工夫が加えられて、現在のような発展を遂げたといえる。継体天皇が福井の産業の基礎を築いてきた背景

には、渡来人による文化・技術の伝来が大きく影響していたと考えられる

7. 継体天皇と福井の産業の関わり

これまでの考察を通して、福井の伝統産業の発祥には、継体天皇の活躍が深く関わっているということがわかった。図表10に示すように、継体天皇が行った治世や、その時代の外交などの時代背景、また、古代の福井には産業が発祥するために必要な豊富な資源があったことや文化、これらが合わさって誕生し、発達してきたのが福井の伝統産業であるといえる。

図表10 福井の伝統産業の背景

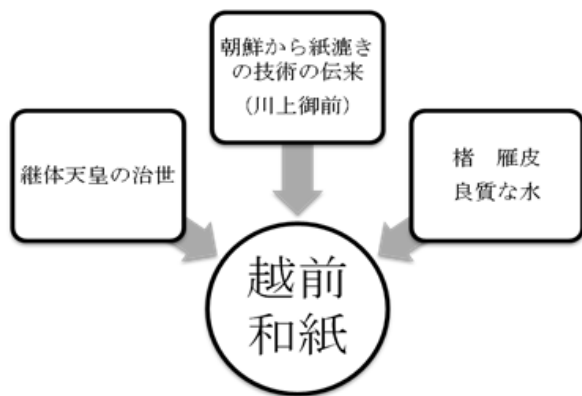


7.1 継体天皇と越前和紙

例えば、図表11で示した越前和紙という伝統産業は、継体天皇とかかわりの深い川上御前という人物が古代越前に紙漉きの技術を伝えたことが発祥とされている。川上御前は、「この地は清らかな水に恵まれているから紙漉きをして生計を立てよ」と、ねんごろに紙漉きの技を里人に教えたという。この教えを受けた人々は、川上御前をあがめ奉り岡太神社を建てて祀り、その教えに背くことなく紙漉きの技を伝えて今に至っている。伝承が示すように越前和紙は、日本に紙が伝えられた4～5世紀ごろには既にすぐれた紙を漉いていたことが正倉院の古文書にも示されており、最初は写経用紙を漉いていたようで、そののち公家武士階級が紙を大量に使いだすと紙漉きの技術、生産量も向上し、「越前奉書」など最高品質を誇る紙の産地として、幕府、領主の保護を受けて発展してきた。そのような長い歴史と伝統の中に育まれた越前和紙の郷では、品質、種類、量ともに日本一の和紙産地として生産が続けられている。この川上御前は継体天皇とかかわりの深い人物と

されているが、朝鮮からの渡来人として越前に渡り、紙漉きの技術を伝えたと考えるのが一般的である。このような継体天皇と朝鮮からの技術、また古代の福井に、楮（こうぞ）・みつまた・雁皮（がんび）という紙を作るのに必要な資源が豊富にあったことも発祥の要因となったと考えられる。また、継体天皇の治水事業によって良質な水が豊富だったという要因もある。川上御前は朝鮮からの帰化人あるいは渡来人であり、紙漉きに欠かせない条件も揃っていたことから越前に技術を伝達したのではないかと考えられる。

図表 11 越前和紙の発祥要因



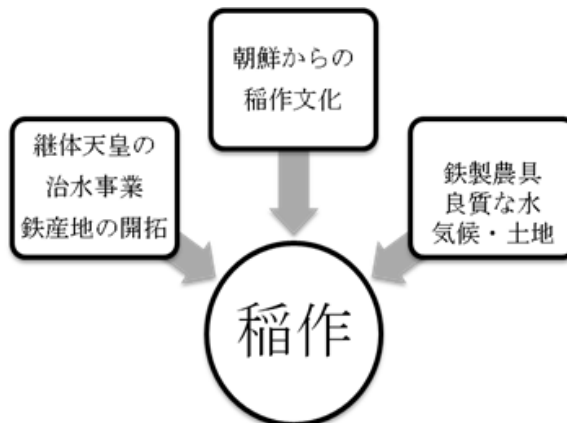
7.2 継体天皇と稲作文化

次に、図表 12 で示した稲作である。古代の越前は、継体天皇の治水事業によって土地が整備され、灌漑施設なども整えられていった。また朝鮮からの稲作文化の伝来、4-2 では継体天皇が鉄を奨励したと述べたが、鉄製工具の技術開発が行われ、農具が豊富だったこと、良質な水があったこと、さらに福井の土地・気候の特徴も合わさり、稲作文化が発達していったと考えられる。

継体天皇が越前の国に住み男大迹王と呼ばれていた頃は、現在の福井平野が大きな湖沼であって、そこへ九頭竜川、日野川、足羽川が注いでいた。大昔は、これらの河川の川底が深く、人が住む土地は高かったが、いつの間にか上流から運ばれてきた土砂によって川底が上がり、洪水のたびに水害に見舞われていた。その繰り返しによって大湖が誕生したものと想像される。そこで、男大迹王は朝命によって三国において河口を切り開き、大湖沼の水を日本海へ流出させ、その跡地を一大田園と化すとともに、漕筋を定めて舟運や灌漑の便を図ったと伝えられている。福井市内を見下ろせる足羽山頂には、継体天皇の徳を偲んで足羽神社が造営されている。また、三頭身の石像が明治 16 年 (1883) に建立され、福井平野発展の守り神として、今も人々

に崇められている。

図表 12 農業の発展要因



7.3 継体天皇と笏谷石文化

継体天皇は和紙や稲作以外にも、笏谷石の採掘を奨励していた。笏谷石（しゃくだにいし）は、約 1600 万年前の火山活動で降りつもった灰が固まってできた火山礫凝灰岩（かざんれきぎょうかいがん）である。主に、福井県福井市の足羽山一帯で採掘され、なかでも北西側山麓部の笏谷地区の石質が優れていたことから、笏谷石という名称がついたとされている。また、水に濡らすと深い青色に変化することから別名「青石」とも呼ばれ、柔らかく細工がしやすいという特徴を持ち、墓石や石仏の材料、塀などに利用されてきた。継体天皇は笏谷石の採掘を奨励し、その利用方法を人々に教えたとされており、越前一帯の古墳から出土する石棺は、丸岡城に展示されている牛ヶ島石棺などを含め、ほとんどが笏谷石製である。継体天皇が笏谷石を奨励した古墳時代以降も、笏谷石の採掘は続けられ、さまざまな場所に活用されてきた。

一乗谷朝倉氏遺跡の盛源寺石仏や、丸岡城天守閣の石瓦など、江戸時代に入ると、巨大な城やお堀をつくるために、多くの笏谷石が使われた。現在でも、福井城の石垣に使われた笏谷石を確認することができる。また建物の材料として、寺や神社、武士の屋敷にも使われていた。笏谷石は、江戸時代を中心に、北前船によって日本各地に運ばれていた。和歌山県には、笏谷石で造られた越前松平家のお墓がある。現在でも、福井の建築物や街並みに笏谷石が使われており、それ以外にも、漬物石や鳥居、温泉などに使用されている。足羽山の山頂にある足羽山公園三段広場には、笏谷石で作成された 4 メートルを超える継体天皇の石造があり、市民から広く親しまれている。このように、笏谷石は古代から現代まで使用され、笏谷石文化として福井の歴史の一部となっている。笏谷石文化は、継体天

皇の治世、福井の資源が生み出し、受け継がれてきた文化であると言える。

8. 継体天皇の地域文化的・歴史価値

福井県では、越前和紙、黒漆、笏谷石などの特産品は、継体天皇が越前にいた時に振興された商品とされ、それらの特産品をつくる村々には継体天皇を祀る神社が数多く点在する。近江でも、琵琶湖を軸として日本海の若狭や敦賀から、大和への商いの道ができ、物資を地方から地方へ動かすことが活発化された。つまり、継体天皇の時代から、馬と船による流通が変化し、システム化されたと考えられる。下記は、『日本書紀』継体元年三月条のなかの詔の一部の現代語訳であり、“産業奨励の詔”として知られている。

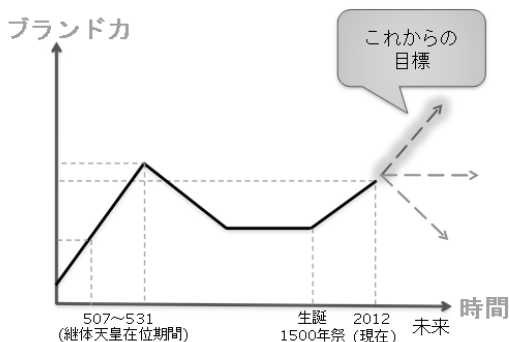
“朕（私）がきくところによると、「男たちは働く年になっても土を耕さないようなことが有る時は、天下は飢饉を受けることになる。女達が働ける年になっても糸を績まなければ、天下は寒さを受けて苦しむことになるだろう。」それゆえ帝王である自ら耕し農業を勧め、后妃自ら蚕を飼い桑を植えるよう勧めよう。言うまでもないが、百寮（国の官を賜っている者たち）、万の男女が農・績を忘れるとき国は富まないのである。官僚たちは天下に朕の思いを知らせよ。”

継体天皇は『詔』において、天皇・皇后が御自ら、耕作と養蚕に励み、日本国の豊穡を祈られるということを示したのである。

継体天皇は、天皇として高い地位をもつ人物であるということだけでなく、越前和紙や漆器、稲作など、福井の産業の基礎を築いたという点でも価値の高い人物である。継体天皇は、天皇・文化・産業の面からみて注目されるべき人物であると考えられる。

図表 13 は、これまでの考察を総合し、継体天皇のブランド力の推移を図として表したものである。

図表 13 継体天皇の文化的・歴史的価値



継体天皇の文化的・歴史価値は、507～531年の在位

期間を通して上昇し、その後は最近になるまで文化的・歴史的価値が見直されることがなかったため、下降し停滞していた。しかし現在、生誕 1500 年祭などにより継体天皇の価値が再認識されはじめ、文化的・歴史価値も上昇してきていると考えられる。そこで、今後も継体天皇の文化的・歴史価値を維持・上昇させ、地域活性化に役に立てる方策や、県内・県外の人々に文化的価値を認識してもらい、情報を発信し続ける必要がある。

9. 現状と課題

継体天皇は福井県の産業発展の基礎を築いたという点で、福井に大きな影響を及ぼしており、価値の高い存在であると考えられる。そのため福井県の活性化のためには、今後にかけても継体天皇の文化的・歴史価値を維持・向上させていくべきであると考えられる。しかし現在、伝統産業の衰退とともに、継体天皇の認知度も低下し、文化的・歴史価値も下降してきているというのが現状である。その原因として、まず、福井県に住む人々自身が、継体天皇や福井の歴史について学んでおらず、継体天皇の文化的・歴史的価値に気付いていないという問題が考えられる。そのため、継体天皇の偉業や魅力、また伝統産業との関係性を、他県に上手く伝達が出来ていないということも問題としてあげられる。福井県は、継体天皇の偉業を、伝承としてではなく、史実として利用することで、文化的・歴史的価値を利用し、伝統産業の継続的発展や、地域の活性化につなげていくべきであると考えられる。そのためには、福井県民が福井の歴史を学べる場所や機会を持ち継体天皇の偉業を後世に伝えることで、継体天皇の文化的価値を向上させることができる。継体天皇の文化的・歴史価値を上昇させるためには、実際、福井県民でも継体天皇についての知識は、県内出身の天皇であるという認識ほどしかない場合が多く、学校教育でも、福井の歴史を十分に学んでいないという現状がある。学校での教育以外にも、各地域で、その地域の歴史や伝統を学ぶ場所や、歴史を巡るツアーなどを設けることなどを施策が考えられる。

現在福井には、「公益財団法人 歴史のみえるまちづくり協会」の福井市歴史ボランティアグループ「語り部」という団体があり、依頼があれば、継体天皇はもちろん、新田義貞、朝倉 5 代、佐々木小次郎、柴田勝家とお市、結城秀康、松平忠直、松平春嶽、地区の歴史、空襲、福井地震など福井のさまざまな歴史についての講師を行っている。またボランティアガイドとして、校外学習や職場の研修会などのほか、観光客への

ガイドにも対応している。このような団体は、福井の歴史を伝えていくためには重要な存在であり、このような団体と連携して市内の歴史ツアーやイベントを開催していくことで、学校教育では学ぶことのできない経験や話を通して福井の歴史を学ぶことが出来る。福井県民がまず、福井の歴史を知ることが、歴史や伝統を見直すきっかけになり、他県への宣伝につながっていく。学校教育以外の場で歴史教育を行うことで、県内での継体天皇の認知度を上げることが出来、そこから文化的・歴史価値の上昇に繋げていくことが出来ると考える。

その延長上に、他県へあるいは世界へ継体天皇の魅力を伝え福井県内での他の観光資源と連携させることで、他県との差別化として、福井県の伝統産業は、継体天皇の歴史と伝統産業の関係性が歴史的に脈々とつながっており、その物語自体に魅力を感じる。現在の伝統産業の宣伝方法は、継体天皇にまつわる伝承などをその産業が発祥した時代のエピソードとして宣伝している。

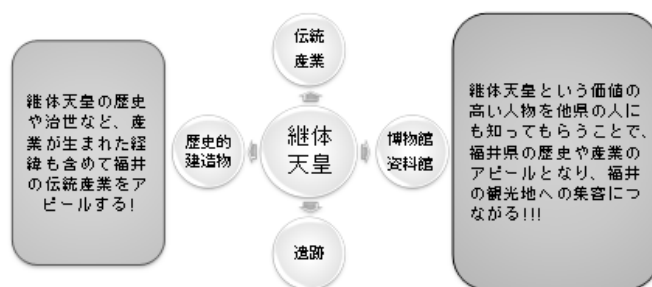
越前和紙を例にあげてみると、福井県和紙工業協同組合のホームページには、その発祥について、「継体天皇が男大迹王（オホト王）として、まだ、この越前に潜龍されておられたころ、岡太川の川上の宮が谷というところに忽然として美しいお姫様が現れました。“この村里は谷間であって、田畑が少なく、生計をたてるのにはむずかしいであろうが、清らかな谷水に恵まれているので、紙を漉けばよいであろう”と、自ら上衣を脱いで竿にかけ、紙漉きの技をねんごろに教えられたといいます。習いおえた里人は非常に喜び、お名前をお尋ねすると、「岡太川の川上に住むもの」と答えただけで、消えてしまいました。それから後は、里人はこの女神を川上御前（かわかみごぜん）とあがめ奉り、岡太神社を建ててお祀りし、その教えに背くことなく紙漉きの業を伝えて今日に至っています。」とある。

また、越前漆器の越前漆器協同組合のホームページでは、「越前漆器の起こりは、約 1500 年の昔にさかのぼるといわれています。古墳時代の末期にあたる 6 世紀。第 26 代継体天皇がまだ皇子のころ、こわれた冠の修理を片山集落（現在の福井県鯖江市片山町）の塗師に命じられました。塗師は、冠を漆で修理するとともに黒塗りの椀を献上したところ、皇子はその見事な出来栄にいたく感動し、片山集落で漆器づくりを行うよう奨励しました。これが今日の越前漆器の始まりと伝えられています。」と伝承が紹介されている。

このように、福井の伝統産業には、産業が発祥した時代のエピソードとして継体天皇の伝承を掲載している。しかしこれでは、継体天皇の偉業が伝説的な意味

合いでしか宣伝できない。そこで、継体天皇がいつの時代にどのような貢献をしたことでその伝統産業が生まれたのかという経緯も含めて産業をアピールすることで、継体天皇自身について興味を持ってもらうことが重要であると考え。他県からの観光客や県内の人々に継体天皇という福井の歴史自体に興味をもらいその継体天皇の業績により、福井の伝統産業が今なおつながっている事実はそれ自体に文化的・歴史的価値がある。その物語を語り継ぐことで福井県の伝統産業の認知度を上げることが出来れば、そこから歴史的建造物や遺跡、博物館などに訪れてもらうことが出来ることになる。（図表 14）に示すように継体天皇の文化的・歴史価値をいかに県内や県外の人々に魅力的に伝え、その分散した文化的・歴史的価値をつなげることが必要であり、そういった人材の育成も期待される。継体天皇が果たした業績が今日の福井や日本においていかに産業価値形成の発展に重要な役割を果たしてきたのかも一度検証し、再認識することで福井県の伝統産業の活性化にもつながり、その文化的・歴史的価値がこのまま埋もれてしまうのが残念でならない。

図表 14 継体天皇文化的・歴史価値を利用した地域活性化



参考文献

- 1) 印牧邦雄『福井県の歴史』山川出版社、1973年。
- 2) 福井市編集・発行『福井市史 通史編1 古代・中世』三秀舎、1997年。
- 3) 高倉忠『丸岡町史』丸岡町史編集委員会、1989年
- 4) 水谷千秋『継体天皇と朝鮮半島の謎』文春新書、2013年。
- 5) 和田萃『継体王朝の謎』河出書房新社、1995年
- 6) 森浩一・門脇禎二『継体王朝 日本古代史の謎に挑む』大巧社、2000年。
- 7) 水谷千秋『謎の大王 継体天皇』文春新書、2001年
- 8) 関裕二『継体天皇の謎』PHP研究所、2012年。
- 9) 野澤伸平『福井県の歴史散歩』株式会社山川出版社、2010年。
- 10) 隼田嘉彦・白崎昭一郎・松浦義則・木村亮『福井県の歴史』山川出版社、2006年。